

(鹿屋市上祓川町水の谷)

位置と環境

遺跡は市街地より北へ約7km離れた位置にある。遺跡の背後には高隈山系の山地が連なり、その裾野に広がる標高約91mを測る舌状台地上に形成されている。同台地上には上楠原・丸岡・水の谷の各遺跡が所在する。

調査の経緯

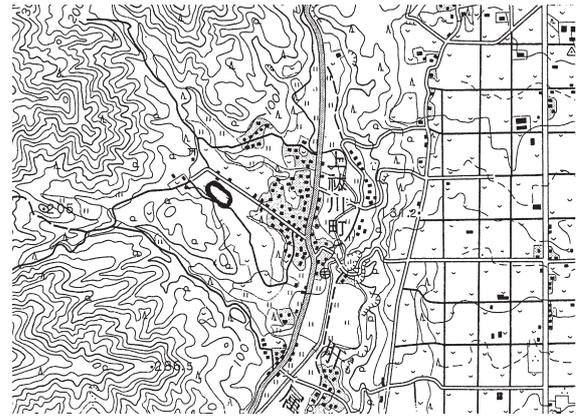
昭和56年度の鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査によって周知の遺跡として認定された。その後、昭和58年には、本遺跡を含む地域内において地区再編農業構造改善事業の計画に伴い、鹿屋市教育委員会が調査主体となって昭和58年に確認調査、昭和59年に本調査を実施した。

遺構と遺物

昭和58年の調査では、縄文時代晩期、弥生時代前期・中期・後期、歴史時代・古墳時代の遺物や遺構が発見された。

遺構には円形竪穴住居跡、隅丸方形の竪穴住居跡がそれぞれ1軒ずつ発見された。遺物は主に縄文時代晩期前半に位置づけられる上加世田式土器、弥生時代前期・中期の土器片として高橋I式・城ノ越式土器に比定される資料が出土している。

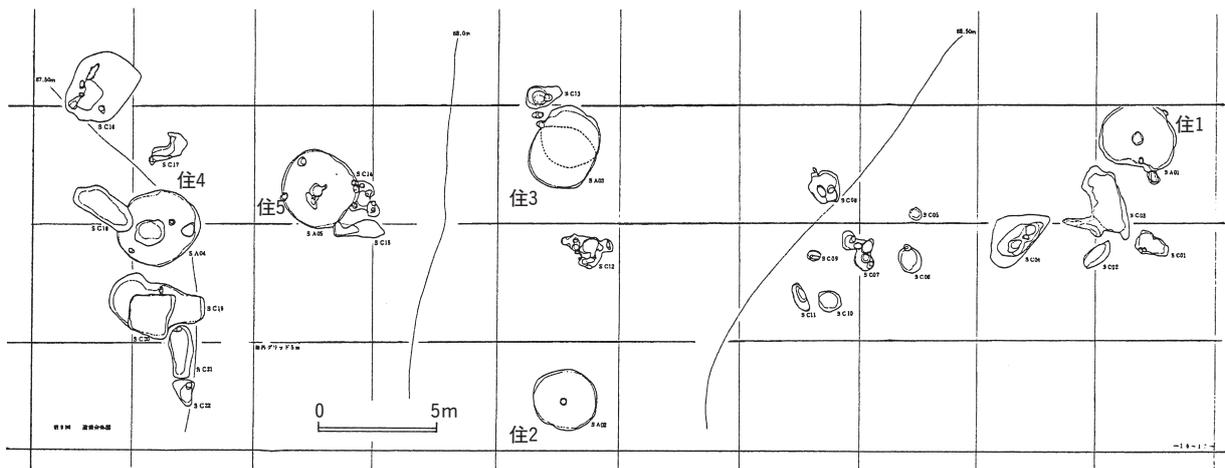
石器は、打製石斧・局部磨製石斧・石鎌・敲石・扁平挟入片刃石斧(第3図9)等の石器が出土している。土器片は小片が多く、復元できた土器は希少であった。



第1図 水の谷遺跡の位置

昭和59年の調査では、縄文時代晩期の遺物と遺構、弥生時代・古墳時代等の遺物が発見された。

縄文時代晩期の遺構は、竪穴住居跡5軒・土坑22基(第2図)が検出された。遺跡の残存状況が悪く、縄文時代から弥生時代の遺物が混在して確認される状況にあった。正確な時期設定は困難であったが、主に遺物の検出状況に基づいて時期を設定した。県内でのこの時期に相当する住居跡の発見例は少なく、生活空間の存在の仕方を考える際の手掛かりとなる貴重な資料を提供してくれた。住居跡の形態は円形プラン(第2図1・2・4・5)を中心に楕円形プラン(第2図3)がある。その規模は、最大床面積(7.3m²)で、3.43×3.17mを測る(第2図4)、最小床面積(4.7m²)で、2.62×2.46mを測る(第2図2)ものがあり、ほかはその規模の枠内にある。3号竪穴住居跡以外は床面中央部に炉穴状ピットを持つという特徴が見られる。ほかに土坑が見られる



第2図 遺構全体図

が、円形・不定形・不整楕円形プランとなり特筆すべき点は見られない。

縄文時代後期から晩期にかけての土器には御領式土器（第3図1）・上加世田式土器（第3図2）・黒川式土器（第3図3）・刻目突帯文土器（第3図4）・孔列文土器（第3図5）・組織痕文土器（第3図6）、弥生時代前期（第3図7）から中期（第3図8）に比定できる特徴を有する土器が出土している。古墳時代の遺跡として知られる吹上町に所在する辻堂原遺跡の出土資料に類似する土器片や、7世紀～8世紀に相当すると思われる格子目や同心円叩き目を有する須恵器片なども発見されている。

出土した石器は、扁平打製石斧・磨製石斧（第3図10）・石匙（第3図11）・棒状石斧・磨石・叩石・ハンマーストーン・石皿・砥石等がある。出土資料

の中で、扁平打製石斧が約半分を占めることは当時の生活の様子を探る上で貴重な資料となる。

特徴

孔列文土器の出土例は、県内でも数少ないものであり、朝鮮半島との関係を示す貴重な資料と言える。

資料の所在

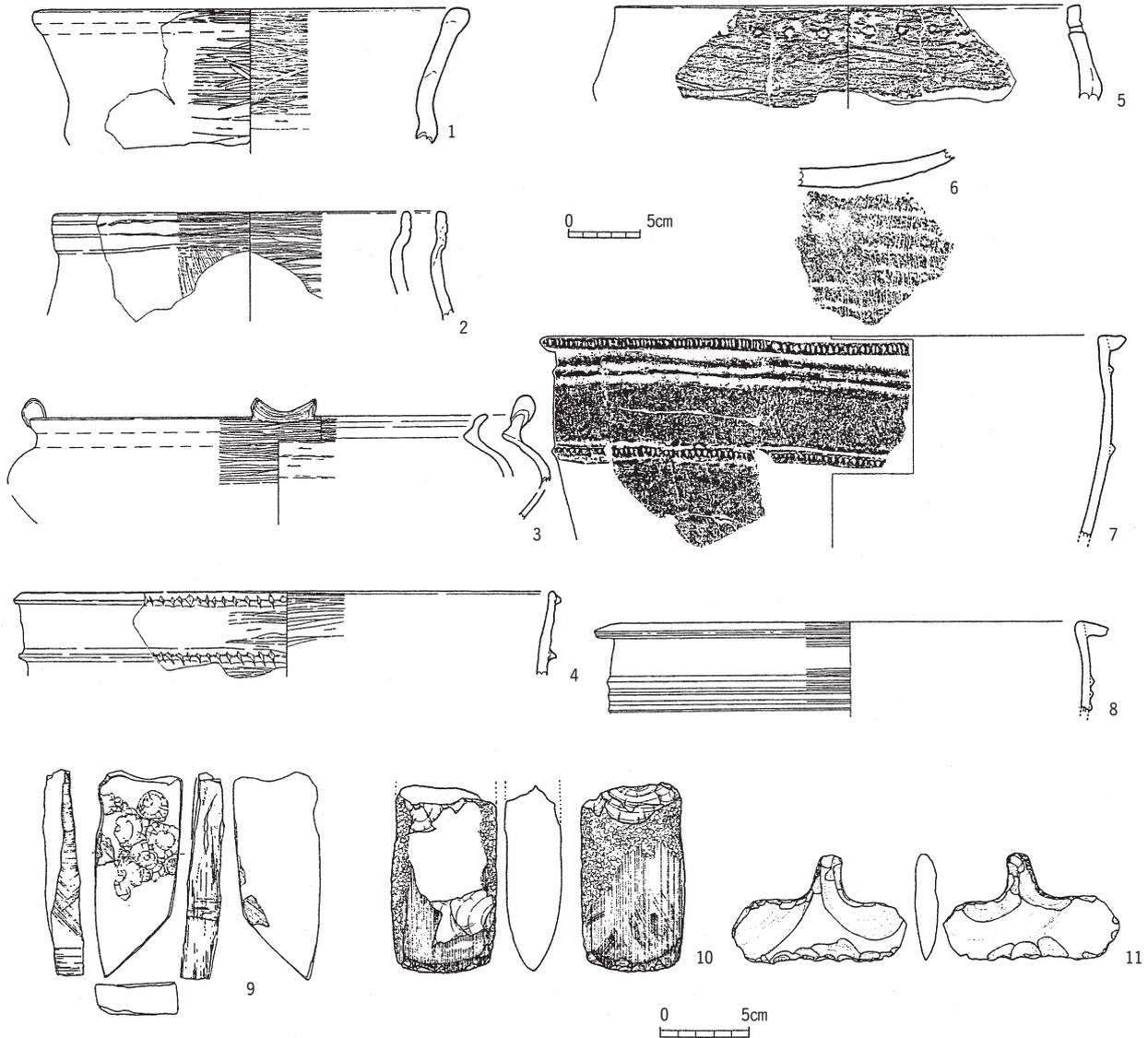
出土遺物は、鹿屋市教育委員会に保管されている。

参考文献

鹿屋市教育委員会1984「上祓川遺跡群」『鹿屋市埋蔵文化財報告書』1

鹿屋市教育委員会 1986「水の谷遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財報告書』5

（山口俊博）



第3図 出土遺物